

DEITEX プロジェクトを振り返って (続)

2. プロジェクトを通じて達成したこと、学んだこと

DEITEX は、フェーズ1は特に灌漑過剰利水が顕著な3県で、フェーズ2はそれらに北部2県を加えた5県で、上記のように「試験研究」「研修」「普及」の各分野で成果を生み、節水灌漑を進めてきた。節水灌漑を広め切ったとはいえないが、プロジェクトサイトでの節水達成に加えて、節水灌漑が自立発展的に進展していく仕組みが作られ、定着されたと考えている。

試験研究面では、もともとシリアに存在していた近代的節水灌漑の技術・経験・情報を整理して、デモ圃場での実証や追加的試験研究も行いながら農家に使いやすい体系に整理できた。研修面では、これまでになかった目標達成型の灌漑普及員研修コースを定着させ、230人余の認定普及員を育てたのに加えて、各県既研修者が主導する自立発展完結的な研修実施サイクルが整備された。普及活動面では、灌漑普及員により研修受講の成果を活かしたモデル普及活動が繰り返され、近代節水灌漑普及に相応しい普及活動サイクルが定着された。また、灌漑早見盤をはじめとする農家向け節水灌漑ツール類や普及コンテンツ(多様なポスターやプロシヤ等)が残され引き継がれるとともに、各灌漑普及員やカウンターパートに対して、「その改善や新規開発のノウハウ・取り組み方」を浸透させた。



DEITEX プロジェクトの研修風景



DEITEX プロジェクトのフィールドデイの一コマ

DEITEX では様々な教訓を得た。下の DEITEX ロゴはシリアでは相当に定着している。それは、同ロゴが「DEITEX が水問題に取り組んでいること」と直結しており、住民に受け入れ易さがあつたと考えている。その背景には、やはり住民一人一人に「水問題を切実と捉えるニーズの高さ」があつたと実感する。「プロジェクトの成否は、その取り組みテーマの切実度、危急度に大きく左右される」は、今回の教訓の一つである。



DEITEX のロゴ

シリア普及員は、「節水灌漑を普及すべき技術・情報がない」、「やり方がわからない」、あるいは「自信がない」という状況にあつたが、DEITEX の実践的な研

修受講を土台にして実践的な普及活動展開を始めている。DEITEX の、[研修テーマの吟味]→[普及員研修実施]→[研修受講普及員による普及活動]→[農家への普及達成]とする活動サイクル(両者を関連づけた目標達成型研修・普及方式)の導入成功は、大きな学習でもある。

もともと「プロジェクト」とは、既存の担当組織では十分でない機能を期間限定的に補完したり、既存組織間の枠を横断的に貫く串刺し機能の発揮などが期待されている。DEITEX の進める「普及による灌漑の節水化」は、関係する各機関や関係者との連携を抜きにしては成り立たない。幸いにして研究、研修、普及各部門間の連携が思いのほか進み、とかく行政組織間の交流が薄いシリアでは今までにない好連携例となった。それはカウンターパートに恵まれたことも大きいし、また各組織・構成員の存在意義を極力貶めないとする団員の配慮なども無関係とは言わないが、本来のプロジェクトが持つ「横串機能」を積極的に活かしたことも大きな勝因と考えている。DEITEX の進めた関連組織間の連携の進展からは、プロジェクト実施ならではの「各関連機関を自由に動ける」「各関連機関を繋げる」等の効用を、一つの教訓として改めて実感した。

DEITEX は、上記の仕組みの定着に加えて灌漑普及員同士の交友と連携につながる「灌漑普及員協議会」の運営も開始した。「終了後も持続し拡大していくプロジェクト活動であったか?」、これはプロジェクトの意義と成否を端的に示す視点である。その意味から言えば、必要な道具立てやシステム、人材は準備できた、今後の持続的展開および進展が大いに期待できる DEITEX であると思う。

いかなるプロジェクトでもそうであるように、DEITEX でも成功や上首尾ばかりではない。試行錯誤の連続であったといってもよい。しかし、結果的には DEITEX は失敗ではなかったし、上記の諸点のみならず多くのことを学ぶことができたと考えている。

伝え聞くシリアの現状は悲惨である。灌漑農業の停滞が長引いており、壊滅的な地域もあると聞く。長年積み重ねてきた灌漑農業の経験と蓄積の上に、さらなる効率的な灌漑農業を目指す DEITEX であった。これまでの灌漑農業が破壊されているとすれば、DEITEX の目標は険しくなっているかもしれない。復旧という追加のプロセスが必要になるかもしれない。いつ事態は収拾するのか。DEITEX 関係者一同、心の休まらない日々が続いている。(2012年8月松島)